

本物の男は、どこにいるの

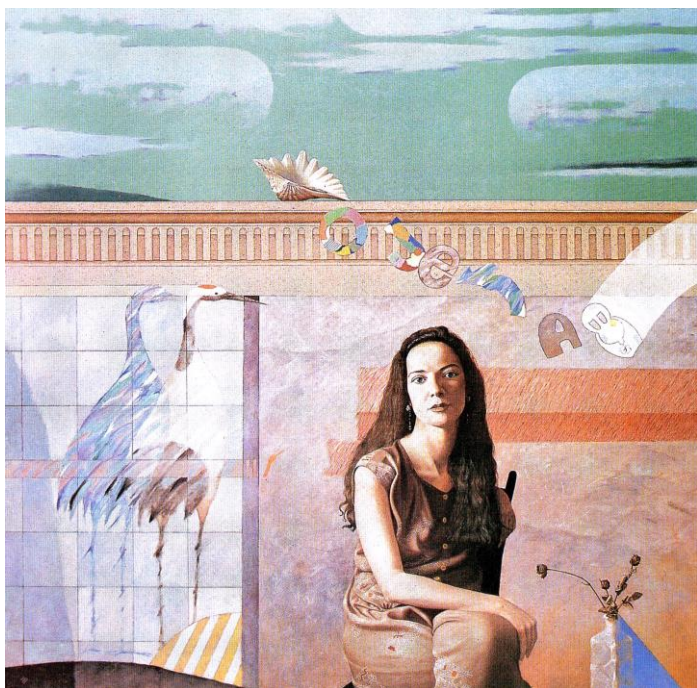
太田春陽
著

本書に登場する人物・団体等は架空であり、実在のものとは関係ありません。

目次

下町にて	六
旅立ち	一八
ブラド美術館	五〇
ベラスケス	六五
ゴヤ 横臥裸婦	九四
スペイン広場	一一一
アトリエ	一三八
愛の確認	一六〇
寿司屋	一六九
バラハス空港にて	二〇五

ありがとう
お母さん、
アンデレア
アクーニャ



|| パローマの夢

下町にて

1

早川から電話があつた。

港区にある杉山の家から早川のアパートまで、山の手線を使って上野駅で降りればすぐ近く、しかし、この日は画材購入もあり、杉山は二駅手前で降りた。下町の身勝手でお人好しな風景を目でスケッチしながら、通りで遊ぶ子供達の甲高い声が、早川のエゴイスティクな愛を憂（うれ）う杉山の鼓膜に刺し込んでくる。

鉄錆の臭いが漂う踏み切りの遮断機が下り始め、警告音と赤ランプの点滅が、どんよりと曇った空に押し付けられる杉山の耳と目にわずかな刺激を与える。遮断機の下りた踏切の前では、買い物かごを下げたおばさん、学生、年配の人、日曜日だと言うのに外回りに忙しいサラリーマン、四人ほどの女子中学生だろうか、キャツキャツと声を弾かせ話に夢中になっている。踏切の向こう側でも、同じような人達が静かに電車が来るのを待って、灰色の雲に覆われた退屈な日常の、そんな人達を見ることも無く眺めながら、杉山は早川の電話の内容を思い返していた。

卒業制作に、杉山の裸体を抽象化した作品を出品すると言う。杉山は何度も彼のモデルになった。モデルになった後、二人は愛し合った。しかし、早川の欲情をむき出しにしたセックスに翻弄する

杉山は、愛し合うごとに、嫌悪をも感じ始めていた。

——このあたりが、潮時かな——

早川と別れることも考えながら、踏み切りの前で待っていた。

「あっ」

杉山を押し退けるように前に出た女性は、

「すみません……」

薄氷のような透いた美しさを持って、杉山に謝った。三十歳前後のその女性は、赤いワンピースに、黄色いバラの花柄が美しい白い白いシヨルダーバックを肩にかけていた。

——黄色いバラの花言葉は、愛の薄らぎ、別れ——

「何するんだ！ 危ないよ」

怒鳴る声にその方向を見ると、先ほどの女性が下りた遮断機をくぐり、踏切の中に入っていた。赤いワンピースの女性を目に留める間もなく、耳を劈（つんざ）く電車の警告音とバギツと骨を砕くような鈍い音と共に、女性の体が銀色に輝く鉄車輪の中に巻き込まれた。

「キヤー！」

「うわあああ！」

「いやだ！ やめてよ」

各々の恐怖に塗れた感嘆詞が耳を打ち、目の前では、赤いワンピースが鉄車輪の間でくるくると

回り、弾き飛ばされた黄色いバラの白いシヨルダーバックが空中を舞いゆつくりと弧を描く情景を、杉山は茫然と見ていた。

「飛び込み自殺だ！」

「うわー、ひでえな、ぐちゃぐちゃだよ」

話に夢中になっていた女子中学生グループが、しゃがみ込んで嘔吐している友人を介抱していた。その女の子を見ると、散布した真つ赤な血と肉片らしきものが服にこびり付いていた。

踏み切りは駅の近くだったので、電車のスピードはそれほど出ていなかったものの、目の前で起こった人身事故の衝撃はとにかく酷（ひど）かった。

電車は止まった。皆、飛び込み自殺をした女性を探すかのように見ているけれど、車輪の中に入ってしまった女性の姿は見えず、僅か五十メートルほど先の車輪の間に赤いワンピースが絡んでいるのが見えた。

「電車に飛び込むなんて、迷惑だよ」

「遺族の人、身内が死んだだけでも大変なのに、この線は京浜東北だろう、損害賠償大変だぜ」

「どのくらい請求されるのかな」

「数千万円、電車飛び込みだけは、やっちゃだめだよ」

「それは酷いな、損害賠償責任のある家族は目も当てられないよ」

そんな会話を聞き流しながら、小さく丸まった赤いワンピースを見ている杉山の鼻腔に、甘酸つ

ばい刺激臭が刺し込んできた。

この臭いには記憶があった。美術大学では解剖室が無いので、医学部の解剖室で美術解剖学を勉強するのである。スケッチブックを手に取り、四十体もの死体の並ぶ解剖室に入った時と同じ臭いだった。杉山はホルマリンの臭いとばかり思っていたのだが、その同じ臭いがなぜ……と思う頭の中に、医学部教授の言った言葉が甘酸っぱい刺激臭の底から甦っていた。

（遺体の中で、顔だけは、スケッチ、デッサンはしないでください）

初めて解剖室に入った杉山は、教授の言った言葉に興味があり遺体の顔を見た。全ての遺体が同じ顔をしていた。それは苦悩と後悔の顔だった。なぜこのような顔をしているのか、教授に聞いた。医学部に来る遺体は、ほとんどが遺族の引き取り手のない自殺、変死体であり、せめて尊厳を守りたいとの事で《顔》は、デッサン、スケッチをさせないとの事だった。

自殺の場合、病死した死臭とは違った臭いがするものだろうか……甘酸っぱい刺激臭を鼻腔に残し、杉山は早川のアパートに急いだ。

2

アパートから、緑に覆われた上野公園が遠くに見える。裸の杉山は白いワイシャツを羽織り、窓を開け、部屋の中の汗に澱んだ淫らな空気を入れ換え、外の空気を胸いっぱい吸い込んだ。しかし、

飛び込み自殺を見たばかりで、六月の温（ぬる）い湿気が肌にべた付く曇った空と同じように、捉えどころのない憂鬱な感情だけが胸を脹（ふく）らませた。

——こんな関係は、もう終わりだな——

早川のエゴイステイックな愛、性欲を処理するだけのセックスでは、愛し合っても愛を確認することも出来ず、加えて愛情を演技する欺瞞（ぎまん）に、杉山は疲れていた。

経済的に豊かで保護された環境で育った杉山は、人間関係に対してそれほど不安はなかった。と言うより、武蔵野美術大学を卒業したばかりの彼は、複雑な人間関係をまだ知らないだけで、恋人の利己的な性格もそれほど厭（いと）わず、気だるい感情に心を任せ早川を見た。裸の彼は布団に横たわり、今描いたばかりの杉山の胸像デッサン、胸を張り顎を突き上げた素描、さすが早川だ。見た瞬間思わず唸（うな）ってしまうほどのデッサン力、早川はそれを見ながら「卒業制作は、これでほぼ決まった」と満足気に言い、自信に満ちていた。

早川は二浪で東京芸術大学に入った。教授も唸るほどの才能は大学二年から開花した。特に、トルソ（胸像）を抽象的に表現する才能は、秀でるものがあつた。ガラス細工のような繊細な気質の中に、物事を冷徹に分析する才能は他の追従を許さず、たちまち彼の名は学部内に広がり、芸大のコンパで知り合った頃には、早川の噂は武蔵美（むさび、武蔵野美術大学）にまで届くほどになつていった。

——将来は、日本画壇を背負って立つ新鋭の画家早川茂吉（はやかわもきち）——こんな噂が、

教授、美術評論家の間で流れていれば、二十歳そこそこの画学生が驕り高ぶるのも無理は無い。

「美佐男、どうしたんだ、もつと楽しそうな顔をしろよ」

早川は、上野公園の方向を見ることもなく眺めている杉山の肩を抱いて言った。

「早川さん、あんた性欲処理だけじゃなく、人を愛する、好きになるって事が、とても大切なこと知っている？」

「また始まったか。美佐男の悪い癖だ」

杉山の疑問には無頓着に、彼は服を着ながら、

「今セックスしたばかりじゃないか、これが愛情だよ」と事も無げに言った彼の目は、分析的な冷たい光を湛え、裸体デッサンを見ていた。

「セックスすることが愛情……愛情って、もつと真剣なものだろうか？」

「真剣なものか……アッハッハッハッ」

早川は笑いながら、しかし、彼の目は子供を見下すかのように杉山を見て、
「おまえに、いいものを聴かせてやるよ」

旧いカセットを取り出し、これも年代ものと思われるラジオにセットした。テープ特有な掠（かす）れる音を響かせ、カセットは動き始めた。

シユールっぽいイントロが続き、三番目に大事なもの。

一番大事なものは、自分なのよ

その次に大事なものは、勉強で

三番目に大事なものは、恋人よ

男の子なら、誰でもかまわないわ

友達に見せるために、恋はするのよ

声を絞らせて張り上げるように歌うグループ、杉山はグループの名前を知らなかった。

「なんだこの歌、凄い歌だな」

「親父が学生時代にハマっていたグループで、RCサクセション。このテープは、吉祥寺でのライブだと思った」と言って、早川はカセットを取り出し日付けを見た。

「一九七三年、五月二十日吉祥寺、もう四十年以上も前だよ」

「お父さんが、そのカセットを君にプレゼントしたの」

あまりにもエゴイステイックな歌にショックを受けた杉山は、教養豊かで大学教授の彼の父親が、こんなグループを好んでいたなんて信じられなかったのである。

「いや、俺が中学生の頃、このテープを聞いて凄く面白かったので、そのまま拝借したってわけだ。ボーカルは、彼の有名な忌野清志朗だよ」

「ええ！ あの人、それにしても凄い歌だね」

杉山はカセットを手に取り、ボールペンで書かれた日付とグループ名を、まじまじと見ていた。

「日本の社会は、四十年以上も前から自分が大事で、その次はいい学校を卒業して、いい大学に入

り、いい企業に就職して、結婚は親が面倒を見てくれ、真剣な愛情の出番なんてないよ」と言つて、杉山の裸体デッサンを見直す早川の目は、真剣そのものだった。

「それが、人生かい」

ぼつりと言つて、アパートに来る前、目の前で起こった飛び込み自殺を話していいものか、早川の性格を良く知る杉山は迷つていた。しかし、早川は杉山の憂鬱をよそ目に、

「そういうこと。安全で安定した人生、これほど真剣で素晴らしい人生つてないだろう。我々の親父の時代から、この素晴らしい人生を勝ち取るために、そうやってきたんだ」

「凄く即物的で、エゴイズムな生き方だな」

「社会で生きるつてことは、そう言う事じゃないか。真剣になる方向が間違つていれば、人生悲劇だよ」

失敗を恐れ、安全で計算された人生。わかっているよ、夢を実現するよりも、安全で安定した人生、結局そこに落ち着くんだ。しかし、思い通りにならないのも人生。いじめ、愛の喪失、孤独、失敗、裏切り、借金、そんな不幸が重なり人生に挫折、あの女性が杉山の脳裏に甦り、早川の性欲の強さとエゴイズムもさることながら、憂鬱になった杉山は、

「早川さん、僕、もう疲れた。しばらく会うのを止そうよ」

勇気を出して言つた。

「会うのを止すつて、俺が嫌いになったのか」

何事も諦観感で見る早川だった。しかし、一人息子でありながらも、幼少から両親の愛情を十分に与えられなかった彼の動揺は隠せなかった。早川の冷徹と諦観感、愛の喪失と孤独の反動でもあったのである。

「好きとか嫌いとかの問題じゃなく、僕達、もう会わない方がお互いのために良いのではないかと
思ってる」

「俺と別れたいのか。お前がそう願うのだったら、それはそれで良いのじゃないか」

精一杯平気を装って言っているけれど、顔は引き攣り、

「お前に、恋人でもいるのか」と言った早川の声は上ずり、震えていた。

「別に恋人はいないよ」

「なんだよ、それじゃ、なんで俺と別れるのだ」

思わず出てしまった感情的な言葉に、早川は慌てて平常を装い、

「見ることも挿むことも出来ない愛情なんて、存在のエッセンスからすれば取るに足らないものだ
よ」と言って裸体デッサンを見ているけれど、せっかく挿んだ愛を失う不安のためか、その目は視
点が定まっていなかった。

情に冷たくエゴイステイックな早川の性格は杉山に欺瞞の愛を演じさせ、それは良心を押し付け
て、早川と会うたび疲れだけが残った。しかし、今垣間見た早川の動揺はなんだったのか、まるで
少女が初恋の人を失うような動揺を見せたではないか。早川の壊れ易い一面を見た杉山は驚くと同

時に、別れ話を切り出した事にすこし後悔していた。

「それじゃ、今日が最後って訳か」

「最後って言うより、しばらく会わないでいようよ」

杉山は、なるべく傷付けないように言ったつもりだったが、

「わかった」

と細く掠れてぼつりと言った早川の声は、自信家の彼からは想像もできないものだった。そして、その短い言葉は、赤いワンピースが鉄車輪の間でぐるぐると回るあの情景のように脳裏に張り付き、二年間も体を許し、それがたとえ欺瞞であっても愛を分かち合い、もう会わないと言っても未練は残った。加えて、早川の動揺を見た杉山はいたたまれず、アパートを出た。

下町の通りは、淑（しと）やかで格調のある山の手の雰囲気とは違い、狭い路地にまで緑豊かな植木鉢が置かれ、その間を猫が行き来している。水を打った玄関の前の自転車、お店の前でおばさん達の弾ける声、小さい子供が自動車に気を付けながら道端で遊ぶ風景、小奇麗であっても、何処となく不揃いな下町の雰囲気が、杉山は好きだった。

「ママーツ、捨て猫ーっ！」

その声に、杉山はしゃがんで見ている女の子を見た。背負ったハローキティの大きなリュックは水色のミニスカートを覆い隠すほどで、黄色いリボンで結んだツインテールの少女は、真剣な眼差いでダンボール箱の中を見ている。杉山が近づいてダンボールの中を見ると、子猫が二匹いた。三

毛猫と白黒の斑猫（ぶちねこ）だった。

「ママーッ、子猫ちゃんお腹空いているよ」

「本当だね、可哀相に」

二十七歳前後と思われる母親は、ニャーニャーと鳴き声を上げる子猫を見ている。

「ママ、飼ってもいいでしょう。子猫ちゃんのママいないんだよ」

「美香、この間、子犬ちゃんを拾ってきたばかりでしょう」

「だって、美香にママいるけど、子猫ちゃん、ママいないんだよ」

「もう、美香は子犬のときもそう言ってる」

「ママ、お願い……」

「はいはい、わかりました。でも美香、ちゃんと面倒見るのよ」

「うん！　ちゃんと見る。嬉しい！」

杉山の側で、小学一年生と思われる少女は、大きな目をきらきらと輝かせ母親を見上げた。細く透き通って弱々しく鳴く子猫も、大きな目で少女をさがるように見ている。子猫ながら、このチャンス逃したらもう生きていけない……そんな真剣さで少女を見つめる子猫がいじらしく、と、その時、

「すみません」と言ったあの女性の声が甦っていた。

自殺した女性も、少女時代はどんなに楽しく、夢見る乙女であったことだろう。どこでどのよう

に人生に躓（つまず）いてしまったのか知る由もないけれど、今、この少女の子猫を救う純粹で眞剣な眼差しも、学歴重視、拝金主義のエゴに塗れた競争社会の中でいつの間にか無くなり、辛苦に翻弄する人生を歩むようになるのだろうか、杉山はそんな事を思いながら上野駅に向かった。

小枝子（さえこ）の顔が、ゆつくりと頷く。

「そうです、オッホッホッホ」

逆さにした緑色の大盆を六つも持っているかのように刈られた日本庭園の松は、初夏の陽差しを受けて、苔の生えた大きな石に影を落としている。縁側の風鈴、緩い風が通り過ぎるたびその鈴の音（ね）は小枝子の弾む声に絡み、清涼感を増す。

「はい……」

また頷くように、ゆつくりと頭を下げる。

池の鯉が、白に赤の斑点、黄色の色彩を弛み揺らしながら、ゆつたりと泳ぐ。

チリリン……。

麻布の自宅では、真紀子の母親が自慢の日本庭園に目を注ぎ、嬉しそうに電話で話していた。

「はい、よろしく願います」

電話を置いた小枝子の顔から、満足気な表情が滲み出ていた。

「お母様、今の電話、豊田様だったの」

「ええ、結納の日が決まったものだから、もう喜んじやって」

「お母様、私の約束守ってね」

真紀子は、最後のチャンスに、もう一度歌謡オーディションに出場するつもりだった。それまでは結婚したくない。

「わかっているわよ。でも、真紀子、健一さんとっても真面目で正直な人よ、真剣に考えてね」

「うん……あつ、お昼、杉山君と一緒だから、心配しないで」

「はいはい、杉山さんよろしく」

「でも杉山君、思いつめたようだったわ、何かあったのかしら」

時計を見た麻布真紀子（あざぶまきこ）は、約束していた喫茶店に急いだ。六本木けやき坂通りにある、世界の高級ブランドの並ぶ店の一角に、その喫茶店があった。ヨーロッパの霞んだ空間を彷彿とさせる喫茶店に入ると、グレーのTシャツに紺のジーンズが良く似合う杉山美佐男がいつものテーブルに座って待っていた。

「ごめん、待った」

「ううん、僕も今来たばかり」

「すぐに話したい事があるなんて言うものだから、心配しちやった。どうしたの」

真紀子の心配には応えず、

「ところで、お見合いは順調に進んでいるのかい」

杉山は両肘をテーブルに付き、冷めたコーヒーを啜る。

「うん、準備着々、お父様が彼を気に入っちゃって、もう断れないわ」

「あ、そう、それで、結婚式は」

「いやだ、いくらお父様が気に入っているって言っても、まだお見合いもしていないのよ。結婚式だなんて、杉山君も気が早いのね」

二人は、クラシックの流れる静かな喫茶店に迷惑にならない程度の声を上げて笑った。

ボーイが注文を取りに来た。長めの黒髪が形のいい額に垂れ、中性的な顔を紅潮させて、杉山をじっと見ている。

「僕の顔に何か付いてるの？」

ボーイは慌てて、

「い……いえ、僕の好きな映画俳優に凄く似ていたものですから、すみません、何にしますか」

彼はしどろもどろになって手を揉んでいる。長い指などしなやかに絡み、筋っぼく大きな手でも、どこことなく女性的な手だった。

「杉山君、コーヒー冷めたでしょう、何か飲む」

「同じコーヒー、もう一杯貰うかな」

真紀子はイングリッシュティーとカプチーノを頼んで、

「ウフフフフ、可笑しい、お見合いもしていないのに、もう結婚式だなんて」

「本当そうだね。何か、真紀ちゃんが結婚に焦っているみたいで、可らしい」

言い出した杉山も、整った顔から切れ長の目を細めて笑った。しかし、彼を良く知る真紀子は、
「杉山君、目が笑っていない、どうしたの？」

「うん、ちよつと厳しいことがあつてね……」

何かを言いたいだけけれど、言い辛そうに顔を歪め、目線は店内を彷徨（さまよ）った。

「僕がゲイじゃなかったら、僕達、恋人同士だったかも」と、杉山は話題を変えるかのように、突然言った。

「ウフフ、そうかもね。私、杉山君好きよ。でも、今は年配の男性の方が、何かしら安心出来るわ」
真紀子はイングリッシュティーを啜り、意味もなく彷徨わせる瞳の奥に、夢も諦め、これから先の生活の安定を探し求める不安が、温（ぬる）い重湯のように潜んでいた。

「安心できるって、精神的に、それとも経済的に？」

杉山は、現実の安定を求める真紀子に意地悪く聞いた。真紀子は、クラシック音楽の流れる店内を見ることも無く、

「その両方ね」と答えた。

明日を現実の安定に包んだ心の澱みが、喫茶店の雅（みやび）な空間に沁み込み癒される。そして、杉山の意地悪を見抜くかのよう

に、杉山君はゲイでも男だし、夢を求めて頑張つて。……ゲイでも男だして言い方、おかしいかな」

「いいよ、それで」

港区にある名門の麻布学園で学び、新宿美術学院、そして、武蔵野美術大学と、まるでエスカレーターのように過ごしてきた杉山は、経済的に不自由しない環境の中で育ってきた。高校のころ同性の級友に恋をして、その葛藤を幼友達である真紀子に告白した。杉山にどことなく惹かれていた真紀子は、彼がゲイと知りショックだった。しかし、そこは幼馴染、異性でも親友を自負する真紀子は杉山の苦悩に耳を傾け、アドバイスなどもした。

武蔵美時代は、自由と表現を求め学んできた。学友、そして教授と、自由、表現、芸術について何度も議論し合った。しかし、いまだ世間知らずな二十歳そこそこの杉山にとって、学んだ自由、自らの表現は、講師、教授が教える事とは裏腹な、言わば卓上の自由であり、自己のない表現でしかなかった。一度でもいい、思いつき自由に羽ばたき、それを表現してみたい。杉山の願望であった。

二年の秋、芸大のコンパに参加した。飲み過ぎて意識も朦朧としていた杉山は、芸大生に介抱されていた。彼は、早川茂吉と言った。コンパの終わった後、酔い潰れた杉山は早川のアパートに泊まった。そしてこの日、杉山は早川に犯された。

同性とのセックス、密かに期待していたことであった。しかし、性欲を処理するだけの早川のセックスは初めてである事もさることながら、彼の激しい欲情に、ショックと激痛だけが残った。

クラシックの流れる喫茶店、杉山は遠くを見つめるように目線を漂わせ、その中で、エゴイステ

イックな早川でも、楽しかった思い出が陽炎（かげろう）のように彷徨う。

「卒業したばかりで、今年十月に二十三歳」

「杉山君は小さいときから画家を目指して、それ、諦めないでね」

「うん……」とつぶやく杉山の頭の中に、早川の言葉が甦る。

——日本の社会は、四十年以上も前から自分が大事で——

いつもなら口を閉じるのも忘れて、彼の夢を一生懸命話していた杉山だった。元気の無い返事に、
「どうしたの杉山君、今日はどうかしてるよ」

「絵を描き続けるって、それが趣味の範囲なら簡単なんだ、誰だって出来る。でも、プロとなると話が違ってくる」と言った杉山の声が震え、瞳が沈んでいるのを真紀子は見逃さなかった。そして、彼の言い辛い事を促すように、

「杉山君の言いたいこと、わかるわ」と言った。

2

真紀子も、芸能界の醜さ冷徹さを、知人友人を通してある程度知っていた。

賞を取るために体を売った若い女の子、デビューはしたもの、売れもせず話題にされなくなつたその子はソーブ嬢になつていたとか、多くの男の子を惹き付けた純情派アイドルが、いつの間に

かアダルトビデオに出演、また、初めの人気に有頂天になり、その後、坂道を転げるように没落していった歌手は、貧乏はいやだとの遺書を残してこの世を去った。

「テーマ、表現形態、オリジナリティ、画風、いろいろな制約と言うか、乗り越えなければならぬ壁があるし、そんな中で、基本的に生活が安定してないと、結局絵も描けなくなってしまう」

「でも杉山君、今からそんな事心配していたら何も出来なくなっちゃう。私達まだ若いよ。若いから、どんな壁でも向かって行けるでしょう」

真紀子は冷めたイングリッシュを啜りながら言った。

「そうだね、真紀ちゃんの言うとおりだよ。臆病になっていたら、やりたいことも出来なくなっちゃう。と言うことで、僕は、僕であり続けるため、僕として僕のやりたい事をやってみる」

憂いの漂う杉山の顔が、このときは少し元気になったようだった。

「それが杉山君よ。ところで話したいことって、なに？ あっ、そうだ、早川さん元気？」

「……」

杉山は黙って虚空を見つめている。整った顔を苦痛に歪め、今にも泣き出しそうな顔だった。真紀子は杉山の目を覗き見た。暗く沈む瞳の中に恐怖と後悔の陰りが潜んでいた。

「杉山君、どうしたの。何かあったの」

「は……早川さん、自殺したんだ」

喉から搾り出すように言った杉山は、堰が切れたように泣き出した。無力感に押し潰された感情

と後悔を胃の中に押し込むかのように歯を食いしばり、しっかりと閉じた唇の隙間から低い声を漏らし、杉山は泣いた。

あの冷徹で、分析、客観性に秀でた早川の性格は、杉山から聞いて知っていた。その彼が自殺するなんて、真紀子は信じられなかった。将来新鋭の画家として日本画壇から期待されていた早川だった。彼に何があったのか。

「どうして、自殺なんて」

「僕が悪いんだ」

嗚咽する喉奥から搾り出すように言った。

「杉山君……」

真紀子は、小刻みに震える杉山の手を両手で握って、

「杉山君落ち着いて、早川さんと何かあったの」

一息ついた杉山は、これまでの経緯（いきさつ）を低い声でゆっくりと話し始めた。

早川を傷つけず関係を保ちたいがために、杉山は欺瞞を心の奥に押し込み、愛を演じなければならなかった。初め犯されたときは、体に激痛だけが残った。でも彼は優しかった。嫌がる自分を優しく導き、セックスの楽しさを教えてくれた。

早川の性癖が異常になってきたのは、臀部が痺れるほどの絶頂感を告白してからだった。失神するほどのオーガズムに、杉山は悲鳴を上げ至極の絶頂へ駆け上っていった。そんな姿に早川の獣性

が刺激され、セックスは次第に暴力的になった。何度も、彼とのセックスは止めようと思った。でも、彼の性欲は強く、愛を強要して何度も犯し、欲情を処理するだけのエゴイスティックなセックスに耐えなければならなかった。そして、暴力へのトラウマと演技する欺瞞に、杉山の体は快感を拒否するようになっていた。セックスをしても心のどこかでそれを拒否してしまい、快感に到達しない体になっていた。

感情の昂ぶりで途切れながら話す杉山の顔は青白く沈み、視線を不安定に漂わせ、まるで何かに取り憑かれたかのように話し続けた。

早川は杉山に無垢の愛を要求した。愛情というものを記憶の暗い底に押し込めた彼にとって、それがたとえ演技であっても、セックスを分かち合う恋人から愛情を示されることによって、幼少から両親の愛を失った早川には、十分癒されるものであった。

杉山は、そんな早川の要求を健気（けなげ）に演じてきた。それは取りも直さず、彼の要求に応えることが愛の証であると信じ、彼も自分の気持ちを知って欲されると信じていたからであった。しかし、彼は要求するだけで、杉山を優しく愛するということは、一度もなかった。

分析能力の秀でた早川は、感情というものを芸術表現の対象にしなかった。常に客観性を重んじて、主観に左右される感情を排除していた。そんな彼が、セックスとなると獣性を剥き出しにして杉山を犯し、愛に飢え屈折した感情を吐き出していたのだ。

杉山の鬱積した告白を聞く真紀子は、一息入れるかのように、

「冷徹な早川さんも、感情に負ける一面があったのね」

「そう言えば、早川さんは、家族の事を僕に話したことがあった」

サデイスチックなセックスの後、早川は感情に任せ、泣きながら彼の過去を語った。早川の両親は知的階層に属する、いわば日本のハイソサエティー。父親は東京大学医学部教授、母親は日本児童教育教会会長を筆頭に、肩書きがずらりと並ぶほど活動的な母親だった。そのようなわけで、早川は幼少の頃から忙しすぎる両親によって育てられ、母親の思い出となるのは、小学校のPTAで母親の顔を見たくらい。あとは、いつもお手伝いさんと一緒だった事。権威的な父親は近寄りがたく、何事も完べき主義で早川を押し付けていた事。また、女の子を見ると冷たい母親とダブってしまい、苛めたくなくなってしまいう感情、それが高じて、青春期から彼のマザーコンプレックスは酷くなり、女性をサド的な感情でしか見られなくなっていた。そして、肝心の愛情は、女性ではなく男性に注がれるようになって……。

幼少から鬱積したものを吐き出すかのように、早川は泣きながら言った。しかし、初めて見た彼の泣き顔は、涙で濡れてはいなかった。涙も出ないほど無意識の内に感情を押し殺してしまう早川に対して、憐れみさえ感じたものだった。感情のはけ口を知らない早川の泣き顔と、別れ話を切り出したときの動揺、冷徹な彼の裏側は、薄氷のように壊れ易い性格が潜んでいたのだった。

「僕が早川さんを自殺に追いやったんだ」

腹の底から搾り出すかのように言った杉山は、こぶしを握り締め、その手を震わせながら自らを

責めている。

「杉山君、そんなに自分を責めるのじゃないわ、どういふことか、話して」

「僕、彼のアパートへ行く前に、踏み切りで投身自殺見たんだ」

「え！ いやだ。踏み切りの飛び込み自殺って、酷いでしょ」

「うん、あんなものを見て、僕もかなり気が滅入っていて、今まで言い出せなかった別れ話を切り出したんだ」

「早川さん、承知しなかったでしょう」

真紀子は、二人は別れ話で言い争いにでもなり、酷い言葉の応酬でお互いを傷付け、その結果が早川の自殺であったと推測したのであった。

「杉山君、早川さんの自殺はショックだけど、もう済んでしまったことよ。酷い事を言ったとしても、エゴイステイックな早川さんだったら、わかる気もする」

「僕達酷い事を言つて喧嘩したわけじゃないよ。早川さん、別れることをすんなりと承知したんだ」
杉山の言った言葉に驚いた真紀子は、

「えっ、それじゃ、なぜ杉山君のせいだなんて言うの」

「早川さん、別れたいのなら、それでいいよって。でも顔は強張（こわば）って声も震えていた。僕、あんなに動揺した早川さん、初めて見た……」

杉山は声を押し殺し再び泣き始めた。初めて見せた早川の動揺、それがたとえ彼のエゴ故であつ

たととしても、杉山にとっては愛すべき人間的な一面を見た思いだったのである。

3

カウンターで客の注文を準備している先ほどのボーイが、仕事の合間から二人の成り行きを心配そうに見ている。

「そんなに動揺してたの」

「早川さんは、別れることを承知したけど、凄く寂しそうだった」

杉山は、嗚咽しながら喉を絞るようにして言った。

「あの、気分でも悪いのですか、何か薬でも……」

心配したボーイが遠慮がちに聞いているけれど、彼の眼差しは優しさに溢れていた。

「ありがとう、でも大丈夫、心配しないで」

真紀子はボーイの優しさに礼を言った。

「それで、別れ話を出した杉山君の責任と思っているのね」

「早川さん相当堪えていたのだと思う。あんなこと言う前に、もっと話し合った方が良かったのか
もしれない」

「杉山君、後悔しているの……」

真紀子は杉山の優しさに、呆れていた。

早川のエゴと暴力的なセックスにもう耐え切れないから、杉山は勇気を出して別れ話をしたのであって、そのショックで、当て付けるように自殺するなんて、早川は死んでもエゴの殻から抜け切れなかった事を、真紀子は杉山にとくとくと言い聞かせた。

「早川さんは、両親の温かい愛情つてものを知らないで育ってきただろう。温かい家庭なんて、彼にとつて現実社会の中では夢物語でしかなかったんだ」

「そこまで彼を歪めた家庭環境だったの。ところで杉山君は、早川さんの自殺をいつ知ったの」

「彼のお母さんから電話があつて、凄く取り乱していた。でも、その前に……」

杉山は何か思い出すかのように遠くを見つめ、

「彼の自殺を知る前に変な夢、夢なのか現実なのかわからないような夢を見ていたんだ」

「どんな夢？」

杉山は記憶を探りながら、後味の悪い夢を話した。

夢にうなされて目が覚めると、ベッドの横に早川がいた。彼は杉山に背を向けたまま、ただ黙つて座っているだけだった。杉山がどうしたのか聞いても何も言わず、その背中から孤独と後悔の陰りが滲み出て、杉山はいたたまれなかった。

翌日も同じような夢を見た。寂しそうに座っている早川に、杉山は、どうしてそこにいるのかも一度聞いた。黙つて座っている早川は、まるで杉山の声が聞こえないかのように虚空を見つめ、

何かを探している様子だった。

顔を歪め苦しそうに話す杉山を見て、真紀子は、

「気持ち悪い夢ね」

幽霊でも見るような目つきで言った。

「そんな夢を見続けて三日くらい経ったかな、今度は早川さんが話すんだ。でもあいかわらず僕に背を向けて」

「何言っただの……」

喫茶店の優雅な空間も凍えるほどの意外な描写に、真紀子は声を震わせた。

「ここ、何処だって、独り言見たいに言うんだ。そしてその日、早川さんのお母さんから電話があつて、彼の自殺を知ったんだ」

「じゃ、その日に死んだの？」

「死後、二、三日経っていたみたい。だから、あの夢は僕に知らせていたんだと思う」と言つて、杉山は声を殺して再び泣き始めた。

自責に咽（むせ）ぶ杉山に見かねた真紀子は、

「二、三日経つてわかるなんて、親も親ね。杉山君、もう自分を責めないで。早川さんの自殺は杉山君の責任じゃないわ」

「ありがとう、真紀ちゃん」と言つたものの、杉山の後悔と自責の念は酷かった。見かねた真紀子

は、何を思ったのか話を変えて、

「杉山君、見て、あの子」

真紀子の示した方向を見ると、先ほどのボーイだった。整った顔のボーイを見ている杉山に、彼の言葉が甦る。

——い……いえ、僕の好きな映画俳優に凄く似ていたものですから——

「あの子、杉山君にぞっこんなの」

「そう、でも、真紀ちゃんが何でそんな事知っているの」

早川の死が振り切れない杉山は冷めたコーヒを啜りながら、沈んだ顔で聞いた。

「私、ここの常連なの。あつ、もうお昼、杉山君何にする」

「うん、知っている。でも僕、食欲無いよ」

「食欲が無いなんて、だめよ。このまま落ち込んじゃって、どうするの」

「わかった。じゃ、ピザにしようかな。飲み物は、ワンカップビール」

「じゃ、私もピザにするわ。あの子見ててね」と言つて、真紀子はボーイを呼んだ。

「すみませーん」

「はい！」

密かに想っている杉山のテーブルにボーイが来た。しかし、今まで二人の状況をそれとなく見ていたボーイは、杉山を労わるかのように絹の柔らかさにも似た微笑を零し、注文を受けながらちら

ちらと見る瞳の中から、期待と憧れに戯れる心の鼓動が伝わってくる。

弾む足取りでカウンターに戻るボーイの後姿を見ながら、

「どう、見た？ あの子、杉山君にぞっこんなのがわかったでしょう」

「うん」

「で、この喫茶店に、杉山君ともう五回ほど来ているでしょう」

杉山を心配する真紀子は敢えて明るく振る舞う。

「へーっ、そんなに来てた」と言った杉山の記憶では、今日が三回目だった。

「二回目で、あの子杉山君に一目惚れ、私が来るたびにあなたのこと聞くのよ」

「そうなの、で、どんなこと聞くの」

「初めは、杉山君とどんな関係なのか、間接的に聞いてきたわ」

「ふーん……」

杉山は、切れ長の目を煌めかせながら、クラシックの音楽に目線を紛らわせて、ボーイを見ている。一七四センチそこそこの背丈は杉山とそれほど変わらず、健康的な身体の影響から、何かスポーツをしているような身体つきだった。

「私はそんな彼の気持ちを察してね、ただのお友達って言ったの」

「反応は？」

「そうですかかって言っただけ。でも、ウフフフ、彼ルンルン気分で、嬉しそうだったわ」

「気持ちが素直に表われるのだね。正直な人間は、話してて気持ちいいし、信用できるからいいよ」
杉山は初心で正直なボーイと、何事も諦観感で見る早川と比べていた。分析能力の秀でた彼は情に薄く、常に客観性を重んじて主観に左右される感情を排除していた。そんな彼が、愛の喪失という悲しみの感情に負け、自ら命を断ってしまったのだ。

「彼、見るとずいぶん若そう。二十歳くらいかしら」

「僕達と同じ年か、そこらへんかな」

ボーイをじっと見ている杉山の沈んだ瞳の中で、暖かい炎が揺らいでいるのを、真紀子は見逃さなかった。そして「杉山君、もう自分を責めないで、早川さんのことは忘れて新しい恋人を探すことが一番だって」と、促すように言った。

「そうだね。悔やんでも、もう過ぎてしまったことだし」

「そうだよ……」

「はい、お待ちどうさま」

注文したピザがテーブルに乗った。マッシュルーム、真っ赤なトマト、とうもろこしの黄色、こんがり焼かれたベーコン、そして、新鮮なパセリの緑など、色彩豊かなピザが目と胃袋を刺激する。

「美味しそう、さあ、食べよう」

焼きたてのピザを頬張りながら、会話を続けた。

「あの子の名前、知ってるの」

「うん、知っている。でも、それは私から言うべきじゃないわ。お互い紹介して知った方がいいよ」
「そうか……、真紀ちゃん、男を知ってる」

杉山は心のつかえが取れたのか、話題を変えた。

「男を知っているなんて、聞きようによっては変に取られてしまうわ。恋人と愛し合うけど、それと男を知るのはちよっとニュアンスが違う、どういうこと？」

「僕は、もっと男を知りたいんだ。本物の男、それがゲイでもそうでなくても、僕は男を知りたいんだ」

「その気持ちよくわかる。小さい人間って、何だかんだと良い事言っても、結局エゴに凝り固まっちゃうでしょう」

男を知るにはまだ若い真紀子は、どうやら恋人と比較し、その小さな経験を言っているのだった。

「今がいい機会、いろんな男（ひと）と付き合うことね」

「うん、そうするよ。そして、僕は僕として僕のやりたい事をするんだ」

静かな喫茶店に流れるクラシック音楽、粹な紳士淑女達が談話を楽しみ、エレガンスに微笑んでいる。

杉山はテーブルを片付けているボーイに視線を注いだ。ボーイもクラシックの奏でに彼の仕草を紛らわせ、その隙間から杉山を見ている。二人の視線に気付いた真紀子は、

「杉山君、さあ、彼とお友達になったら」

「そうだね……」

言い終わらないうちに、善は急げ、気の早い真紀子だった。

「すみませーん」

と、手を上げてボーイを呼んだ。

整った顔から清々しい笑みを零し、

「はい、お勘定ですか」

「いえ、お勘定じゃなくて、このピザ、とっても美味しい。さあ、杉山君」

「あつ、すみません。僕、杉山美佐男です。よろしく」

「えっ……あつ、ど、どうも、ぼ、ぼ、僕、美穂です、美穂涼一」

秘かに想っていた男性を何の前触れもなく紹介されて、しかし、クラシック音楽など鼓膜に煩わしいほど有頂天になる想定外の展開に、美穂涼一（みほりよういち）は、しどろもどろになって自分を紹介した。

紹介した後、さて、これから何をしたらいいのかわからない二人は、真紀子に援軍を頼むかのようを見て、でも、真紀子も勝手がわからない。「どうしたらいいの、杉山君あなた三分の一男でしょう、何とかして」三人の隙間を優雅であるはずのクラシック音楽もぎこちなく流れ、不思議な沈黙が漂う。と、杉山は意を決したように、

「あの……僕、ゲイです」

同性愛を隠し友人を探し求めてきた杉山だった。彼の性格を知った友人達は皆背を向け去って行った、そんな失敗はもう繰り返したくない。杉山は勇気を出して言った。

（さすが杉山君、男、女だ。ややこしい、もうどっちでもいい！）

真紀子は拍手したい気持ちで美穂を見た。

彼は、睫毛の長い切れ長の美しい目を点にして、と、突然その目はきらきら星に代わり、

「よかった！ 僕も同じ」と言つて、額を隠す黒い前髪を手で払った。紅潮した嬉しそうな笑顔に、きらきらと光る目が真紀子の目に飛び込んできた。欲しかったものをやっと手にした小さな子供の目のように、純粹で喜びに満ちた目だった。

「これから、僕と付き合ってくださいますか」

早川の自殺で落ち込んでいた杉山は、期待と不安を心に止めて言った。

感情の昂ぶりで先ほどまでどこちなく聞こえていたクラシック音楽もこのときばかりは、なんと透明感のある、限りなく青い空を突き抜け宇宙に蔓延する暗黒物質を払拭するかのように聞こえ、美穂は杉山の願いを快く承諾した。嬉々として仕事に戻る美穂の後姿を眼で追いながら、

「良かったね、杉山君。あの子凄く嬉しそうだったでしょう、なぜだか知っている？」

「さあ……あんなに嬉しそうにされるなんて、思ってもいなかったよ。で、どうして？」

「ゲイってさあ、まだ世間は認めてくれないでしょう。ホモだゲイだのと大きな声で言えないし、

誇りを持って言ったりしたら、もう馬鹿にされちゃう」

「うん、そうだね……」

杉山は何か言いたそうだ。しかし、それを喉奥に押し込み、真紀子の言葉を待った。

「そんな事で、彼は友達一人もいなかったの、可哀相でしょう」

「そう言うことだったの。二十歳前後で友達がいらないなんて、厳しいよね」

「だから、杉山君から付き合ってくれて言われたのが、あの子凄く嬉しかったのよ」

「わかるな、その気持ち。早川さんも、僕しか友人はいなかったんだ……」

残ったビールを飲みながら、杉山の視線は過去の陽だまりに注がれていた。

小さいときから男の子と遊ぶのが嫌で女の子と遊んでいた。服なども、女の子のような色、赤・ピンク・黄色・淡いブルーなどを好んだ。中学に進み、内面の母性は日に日に強くなり、同級の男の子に恋をした。それを知った生徒は、杉山は女の敵、男が好きなんだ、ホモだぜーと黒板に大きく書かれた。皆笑って自分を卑下した。自然と友人も去り、中学でもバカにされ、杉山は苛めの対象になった。

高校になって、初めて友人が出来た。嬉しかった。彼は信用できると思い、自分の性格を告白したが、翌日から友人の態度はよそよそしくなった。どうしたのか、彼に話しかけた。彼の自分を見る目の中に、怯えと嘲笑が潜んでいた。なぜ怯えるの、なぜこの性格を嘲笑するの、わからなかった。でも、彼を傷付けたくなくて、杉山は自ら去って行った。

高校時代は、中学のように苛めはなかったものの、同級の友は杉山に背を向け無視した。高校の思い出は、「孤独」この二文字しか記憶に残っていなかった。

4

「就活する前に、僕、外国に行こうと思っている」

杉山は何を思ったのか、突然言った。

「外国に行くって、一人で行くの？」

「うん、武蔵美時代、上智に聴講に行つてスペイン語を勉強していたんだ」

「ああっ、そう言えば、スペイン語を習っているって言っていたわね」

「スペインに行つて、ベラスケスのラスメニーナス、これをじかに見てみたいんだ」

「ラスメニーナス。あの有名な作品ね」

「思い出すかい」

「うん、何となく……」

聞くこともなく、エレガンスな喫茶店内を流れるクラシックに耳を託し、真紀子の目線は淡い記憶の中を彷徨っている。

「官女達が前面にいて、ベラスケスとキャンバスが大きく描かれているだろう」

「うん、思い出した。真ん中の女の子の周りに官女がいて……」

「マルガリータ姫、その後ろの鏡に写ったフェリーペ四世とお妃。だけどこの作品、記憶ははっきりしないけど、確か十九世紀の半ば頃まではフェリーペ四世家族と題名されていて、それ以降題名はラスメニーナスになり、二十一世紀になって本当の題名がわかり、それは、王位継承の図だって。なぜ題名がころころと変わったか、わかる？」

「へーっ、そんなに題名が変わったの。だけど、題名が変わるって言うか、変えるって言うか、そんな事をして、ベラスケスも迷惑ね」

「そうだろう、僕もなぜ題名を変えたのか、そこに凄く興味があるんだ。いろいろ資料を調べても、なんで題名が変わったのか理由がないんだ。ただ題名変遷を書いているだけ」

「なぜ変わったのか、これが重要なのにそれを書かずに、題名変遷だけ……世の評論家は、何を研究しているのかしら」と言って、真紀子はラスメニーナスを思い浮かべているけれど、マルガリータ王女と作品の中に描かれているベラスケスとキャンバスなどが印象深く、でも細部がよく思い出せない。そんな真紀子を察して、杉山はスマホからベラスケスのラスメニーナスを引き出した。

「ほら、これでわかるだろう」

そこには、真紀子の記憶どおり中央にマルガリータ王女、彼女を取り巻く官女達、そして、ベラスケスがキャンバスに向かって制作している図柄が写し出されていた。

「これも小さな疑問だけど、制作当時の題名がフェリーペ四世家族だろ。だったら、なぜ家族でも

ないベラスケスを画面の中に描いたのか、不思議だろう」

「本当にそうだわ、言われるまで気が付かなかった……」

スマホで淡い記憶を確認しながら、名画の秘密に気が付く真紀子は声を弾ませた。

「偉大な画家の秘密を知るためにも、スペインに行つて名画を直接見たいんだ。僕の知識と目で、作者の秘密が発見できれば良いけれど、まずは見てみることだな」

絵画の話になると、杉山の目は子供のように輝きを増し自由に飛び跳ねる。そんな杉山を見ると、子供のときから変わっていない彼の目の輝きに、真紀子の淡い感情が甦っていた。

「杉山君、すてきな目をしている。私はそんな杉山君がとっても好きなんだ」

「ありがとう真紀ちゃん。僕はスペインに行つて、なんとしてもベラスケスの秘密を暴いてやる」
「頑張つて。画家になる夢、諦めないでね」

「うん」

ベージュとエメラルドグリーンの絡む静かな喫茶店の、優しく愛撫するかのように流れていたクラシック音楽が変わった。

「あつ、サテイー……サテイーのピアノ好きだな」

杉山が遠くを見つめる目で言った。思い描くヨーロッパの地を見ているのが、容易にわかった。視線を、まだ見ることのない理想の地に馳せる非現実な彼の眼差。クラシックでありながら、シユールレアリズムを彷彿（ほうふつ）とさせるエリックサテイーのピアノ曲のように、杉山の夢見る

切れ長の目は、期待と自責の念の織り成す非現実な響きを持って彷徨う。

真紀子と別れた後、心にしこりの残る杉山はショッピングで気分を紛らわせた。モンブランの、ショウウインドウの中に飾られている腕時計に目が釘付けになった。シックでシンプルな腕時計はノモスに似て、モンブランでは今までにないニューデザイン、咽喉（のど）から手が出るほど欲しい腕時計だった。しかしモンブランは、二十歳そこそこの経済力ではとても買えるものではないブランド品、杉山は、ショウウインドウに閉ざされた腕時計をじつと見ていた。

杉山は何気なく目線を変えた。ウインドウに、自分の顔が写っている。見ると、ウインドウに閉ざされて欲しい物が手に入らない焦れに歪む、哀れな顔だった。その顔を見ている杉山はふと思つた。実はウインドウに写った顔が現実の顔で、目線を腕時計に移すとウインドウに写った顔は視覚から消えて、欲しかった腕時計が目刺し込んでくる。とすると、ショウウインドウの中に実在する腕時計は、手を差し伸べることの出来ない泡沫（うたかた）な夢の世界であつて、ウインドウに写った夢を実現できない哀れな自分の姿が、実は現実の世界なのだろう。ウインドウに写る被写体そのものが現実であつて、その中に飾られている高級品は、儂（はかな）く揺れる夢の世界なのだ。

ショウウインドウを眺めている杉山の頭の中に、早川の面影が転がり込んできた。何事も諦観感で見ている早川だった。しかし、早川は彼なりに真剣な愛情を求めていたのかもしれない。たとえそれがエゴの極みであつたとしても、そのような方法でしか愛を求めることが出来なかつた早川が、哀れでならなかつた。

あの特別れ話を出さず、もつと話し合っていればと思っても、早川は人の話を聞く性格ではなかった。あれほど日本画壇、教授陣から期待されていた早川の儂い人生を思い返す杉山は、シヨウウインドウに写った哀れな自分の顔を見ながら、

(結局、社会で安定した居場所を探し、夢など実現できない現実を見据えるって事か) と思った。

「杉山さーん、杉山さーん……」

後ろから呼ぶ声に、杉山は振り返らずウインドウを見た。美穂が駆け足で近付いてくる。シヨウウインドウを見ていると、彼はどんどん迫ってくる。杉山は嬉しくなった。美穂の清々しい笑顔がわかるほど迫ってきた。

「どうしたの、聞こえなかったの」

杉山が自分の方を振り向かずじつとウインドウを見ていたものだから、美穂はふくれっ面で抗議したのだった。

「そうじゃないよ、僕は君をじつと見ていたんだ」

「えっ、どこで見ていたの」

「ほら、ここにちゃんと見えるだろう」と言っつて、杉山はシヨウウインドウを示した。そこには、青春と青年の力に漲(みなぎ)る二人の姿が写っていた。

「どうしたの」

「あつ、これ」

美穂はスマホを渡した。

「あつ、ありがとう。スマホを忘れるなんて、僕は、何を考えていたんだろう」

「僕も、こんな大切なもの忘れるなんてと思って、必死になって追いかけてみたけど見当たらなくて、もう諦めていたのよ。すると、杉山さんがじっとモンブラン見ているじゃない、あつ、あそこ
にいた！　なんて嬉しくなっちゃった」

杉山を見つけた美穂は夢中になって走ってきたものだから、端正な顔を歪め息を吐切らせて、しかし、本当に嬉しそうだった。

「杉山さんは、スペインに行くのですか」

一息した美穂はウインドウに写った杉山を見て言った。

「えっ、どうして知っているの」

「うん、聞こえちゃった」

「あつ、そう。まだ行く日は決めていないけど、行くよ」

杉山も彼に習ってウインドウに話し掛けている。

「スペイン、僕も行きたいな」

何を思ったのか、美穂はいじらしく言った。

「行きたいだなんて、君、仕事はどうするの」

「あそこはおばあちゃんの経営で、僕は手伝っているだけ。バイト料は貰っているけど、時間は結

構自由に出来るんだ」

「そう、それはいいことだね。で、スペインに行つて、観光？」

「それもあるけど、杉山さんは、ベラスケスのラスメニーナスの秘密を探しに行くのでしょうか」

「あら、そんな事まで知つて、全部聞こえたの」

「ごめんなさい……スマホ見ちゃつた」

「見た？」

「だつて、誰のスマホか知らなくっちゃ、探しようがないでしょう」

「正解。そう、巨匠の秘密、ベラスケスだけじゃなくて、ルーベンス、ゴヤ、エルグレコ……いろいろ知りたいことがいっぱいあるんだ」

杉山は、一生懸命ウインドウに向かって話し掛けている。と、ショウウインドウに映つた美穂が応える。

「僕もスペインに行つて、いろんな事を知つて、役に立てたいんだ」

「役に立てたいだなんて、君はボーイ以外に何かやっているのかい」

「僕の夢は小説家なんだ。もう三回ほど新人賞に投稿して、今新しい小説を書いているところです」

「ふーん、小説家志望か。僕は画家志望」

「えっ、画家！ すてき！」

美穂は飛び上がって喜んだ。というのも、彼の伯父が画家なので、それなりの素養はあつた。杉

山と話が合う、趣味が一緒、これが飛び上がった喜んだ理由だった。

「画家の卵と小説家の卵か、まだ雛になつていないけど、殻を破つて出てきた雛、見たことある？」
「ええ、ドキュメンタリーなどで見ました」

「あっちこっち禿げてて、くちばしは黄色く目はぎよろ目で、毛と言うか、羽は頭から立ち上がって醜いけれど、若鳥になつて大空を羽ばたき……」

杉山は、ウインドウに写つた二人の姿を見て言つた。まだ孵化していない卵の二人だった。雛になり、順調に成長して若鳥になれば、今の二人は、どのようになっているのだろうか。

「本当にそうですね。若鳥になったら、美しいです。本物つて、どんな形でも美しいです」

美穂は杉山の思いを見通すかのように答えた。

「本物つて、どんな形でも美しい……いい事言うね。美しくなると言うことと、本物になると言うことは、ひよつとして同義語なのかもしれない。だけど、本物の形になるまでが大変だ」

更に杉山は、なにを思つたのかこう続けた。

「美穂君、どうせスペインに行くんだつたら、僕と一緒に行かないかい」

ウインドウに写つた美穂に話しかけた。彼の顔は好感度最高で程よく整い、華奢（きゃしゃ）な体ではあるけれど、服の上からでも筋肉質な体軀である事がわかつた。

杉山の提案を聞いた美穂はあまりにも嬉しくて、

「じ、時間は、じゆうぶん自由に来るので、い、行く日が決まったら、お、教えてください」

歓喜の感情に支配された舌と口が、意思を無視して跳ね動いた。

「OK、予定は、たぶん八月ごろになるけど、いいかな」

嬉しさのあまり、強張った頬の筋肉を両手で揉み解し、すると、せつかくのイケメンが左右非対称のピカソの肖像画のようになり、

「な、夏休み、ちょうどいい時期です」

「ところで、美穂君は何歳」

「十九歳です」

「僕二十二歳、武蔵美卒業」

「僕は、早稲田文学部日本文学、休学中です」

「休学中？ どうして」

「うん、いろいろあって」と言った美穂の顔から悲しげな憂いが漂い、杉山は察して、

「僕達、世間の異端者、つまはじき者って感じがあるから、そんな連中と一緒にいると、堪えられなくなっちゃう」

「そうですね。でも、喫茶店で杉山さんずいぶん落ち込んでいて、僕凄く心配しちゃった。何かあったのですか」

「うん、ちよっと……」

美穂はいい辛そうな杉山を察した。

「ごめんなさい、変な事聞いて」

「気にすることはないよ。落ち着いたら話すことが出来るかもしれないから」

杉山と友達になつたばかりの美穂は、人に見せたくない傷を無理矢理覗き込んだかのような気まぐさを感じ、

「あつ、もう仕事に戻らなくっちゃ、今度またうち（喫茶店）で話そう」と言つて駆け足で喫茶店に戻つて行つた。

一人残つた杉山は、美穂の優しさと憂いを思い返していた。

——真紀ちゃんは、美穂君には一人も友達がいないのよと言つた。僕はその意味がよくわかつた。友達を探し仲間を求めて自らの性格を伝えようと、皆彼に背を向け去つて行つた。ゲイがなぜ悪いのか、僕は何も悪いことはしていないじゃないか。ただ、一般の男性が女性に恋をするのと、僕達が同性に恋をするのと方向が少し違うだけじゃないか。僕は女性を毛嫌いしているわけじゃないんだ。事実僕には真紀ちゃんと言う親友がいるし、ちよつと違つただけでこの社会では馬鹿にされ異端者扱い——

杉山は、早川の死と悔しさとも取れるやるせない気持ちの中で美穂の憂いを思い返しながら、彼と一緒に行くスペイン旅行に思いを馳せていた。

悲しい事は心の引き出しの中、嬉しい事は心の机の上、さあ、美穂君は小説家志望、自分はスペイン絵画の巨匠の作品を直に見て、画家への大いなる糧にしたい。また、誰も発見していない巨匠

達の制作のミステリーを発見したい。ショウウインドウに写った杉山の姿は、モンブランの高級腕時計を覆い隠すように映っていた。